

## 4 県内 HPAI 発生を踏まえた農場防疫計画の精査

下北地域県民局地域農林水産部むつ家畜保健衛生所

○佐怒賀香澄 木村 揚  
蛭名 力斗 今井 良  
安本 守宏 高橋 俊樹

### 1 はじめに

令和 3 年から 4 年シーズン、本県では、種鶏 1 事例、肉用鶏 3 事例、採卵鶏 2 事例、計 6 事例の高病原性鳥インフルエンザ（以下 HPAI とする）が発生した。管内では、令和 4 年 4 月と 11 月に肉用鶏農場で 3 事例発生があり、防疫対応を行った。

県内発生で防疫対応に直面し、本県は様々な場面で対応に苦慮した。そのことから鶏の用途別農場について現状の計画を精査し、情報を農場と共有・協議することにより、実行性のある防疫計画（以下計画とする）への更新が必要だと考えた。

また、防疫拠点について初動で迅速な設置が必要であることから実状にあった内容にするためこれらと合わせて精査・更新することとした。

### 2 管内農場の概要と課題の精査

精査をするにあたり、管内農場の概要について整理した。種鶏農場は 10 戸、全て A 企業の系列農場であり、鶏舎構造はほぼ同じものとなっている。肉用鶏農場は 15 戸で、種鶏農場と同じ A 企業系列の農場である。発生農場と同じ約 9 千羽飼養の鶏舎で構成された農場が 11 戸、約 1 万 5 千羽飼養の大型鶏舎で構成された農場が 4 戸である。採卵鶏農場は、B 企業の系列で、成鶏農場は 1 戸である。鶏舎構造は 2 階建てでケージは直立 7 段である。

以上、農場概要と発生事例を基に現状を精査した。

種鶏は、県内発生事例で産卵箱の下に鶏が入り込んだため捕鳥に時間を要し、迅速な作業の障害となっていた。そのため、産卵箱の対応策を検討することとした。

肉用鶏は、管内発生時の防疫対応を基に、作業にかかる所要時間と殺処分動線について再精査した。また、発生事例のない大型鶏舎の作業内容について再確認し、質の高い計画に見直すこととした。

県内の採卵鶏発生事例では様々な種類のケージや高床式鶏舎等の鶏舎構造に対応した殺処分作業が行われた。ボイド管の使用や階段を物品移動のスロープとして活用した事例があったため、臨機応変に対応可能な計画が必要と考えられた。

初動では、現場事務所と集合施設の迅速かつ円滑な設置がもとめられている。そのため現場事務所はコンテナ等の配置を精査し実施可能で具体的な計画が必要で、集合施設は担当職員のみで設置を行う事から誰でもわかるレイアウトでの計画が必要であると考えられた。

以上、課題が見つかったことから対応を開始した(図 1)。

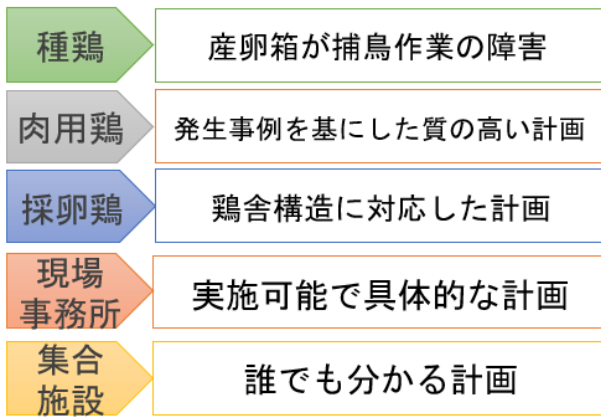


図1 課題の精査結果

### 3 各取り組みについて

#### (1) 種鶏

種鶏については、産卵箱への対応策を検討するため、農場との協議を行った。

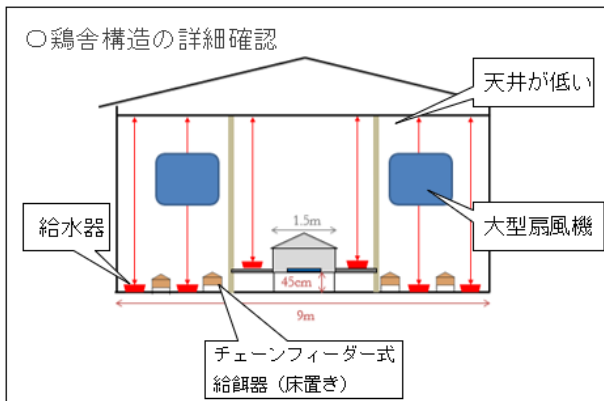


図2 種鶏舎構造

まずは鶏舎構造の詳細について上図のとおり確認した(図2)。中央には産卵箱が設置され、チェーンフィーダー式の給餌器(以下給餌器とする)が舎内を一周する形で設置されている。また給水器は吊り下げ式で上下に調節可能となっている。さらに天井は低く、大型扇風機が設置されている。

どのように捕鳥するか確認するため、廃鶏作業について農場に聞き取りを実施したところ、作業は産卵箱等の機材を全て撤去したうえ、防風ネットで鶏を出荷口まで追い込み、捕鳥するとのことだった。

また、産卵箱を撤去しない場合には、防風ネットで箱下を囲い鶏が入り込まないようにする対策が可能であること、機材撤去には人

数と時間が必要なため、状況に応じた対応が必要であることを農場と確認した。さらに、農場との打ち合わせのなかで産卵箱以外にも懸念事項が浮上した。

給餌器は床に設置されていることから捕鳥作業に支障をきたすおそれがあり、取り外しには専用の工具と技術が必要であること、低い天井に設置されている大型扇風機も作業の障害になることが懸念された。

また、消毒作業について確認したところ、貯水量が少ないため水を大量に使用すると水不足になることが懸念された。これについて、農場との協議により、給餌器は従業員が撤去すること、大型扇風機は取り外しが容易なこと、水不足の時は農場所所有の給水車で供給可能であることを確認した。

以上のことから、殺処分作業時の廃鶏作業を参考にした防風ネットの使用、産卵箱や給餌器等の機材の撤去は従業員が対応し、作業体制は状況に応じて変更すること、大型扇風機は動員者が取り外すことについて殺処分時の留意事項として計画に追加した。

また、給水について鶏舎消毒の項目に追加した。

#### (2) 肉用鶏

農場	鶏舎	処分時間	更新後の計画
発生農場鶏舎	 10m×55m	飼養羽数: 17万羽 処分時間: 3.5日→ <b>2.6日</b>	 両側作業
大型鶏舎 立入を実施し 鶏舎構造を 確認	 10m×90m×2鶏舎 = 1建屋	飼養羽数: 19万羽 処分時間: 3.5日→ <b>3.4日</b>	 片側、2鶏舎同時 作業

表1

管内発生農場の防疫対応を基に処分時間や計画等を見直したところ、発生鶏舎と同じ型の鶏舎については上表のとおり(表1)で、従来の処分時間は飼養規模17万羽の農場の場合

3.5日だったが、発生事例を基に2.6日と再計算し計画を更新した。

殺処分作業は動員者を2班に分けて鶏舎の前室側出入口・出荷口の両側で実施する、発生事例での方法に変更した。

大型鶏舎については、農場の立入調査を実施し、鶏舎構造が2鶏舎で1建屋になることを確認した。殺処分作業は動員者を2班に分けて出荷口に向かって並列で作業する動線へと計画を更新した。

### (3) 採卵鶏

臨機応変に対応可能な計画とするため、農場立入を行い、計測済みの通路幅に加え、作業に関わる場所について詳細に計測した。

まず通路は自動給餌機によって狭くなる箇所を計測した。次にケージについて、ケージ一個の寸法と、ケージ最上段と中段の高さを計測した。資材の確認のため、高さ74cmの踏み台使用で最上段の捕鳥が行えることも確認した(図3-1)。

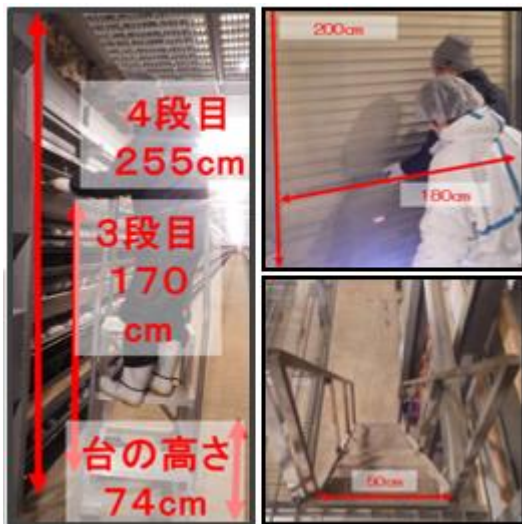


図3-1 ケージ 図3-2 出荷口と階段

さらに出荷口や階段などの幅、高さを計測し写真で記録した(図3-2)。従来の計画では、鶏舎内構造は図で表していたが、農場立入により得られた情報を鶏舎内作業がイメージしやすいように、計画に写真を追加、整理し、反映した。

### (4) 現場事務所

従来の計画では、事務所設置場所の想定はしていたが、具体的なコンテナや簡易トイレ、動員者休憩場所の配置は決まっていなかったことから、計画を精査した。詳細なレイアウト案を作成し、それをもとに現地調査及び農場との協議を行い、設置可能であるか確認し、計画に反映した。その他、発生時には対策本部や各防疫拠点との連絡体制や円滑な人員の搬送が重要であることから、特に山間部にある農場10戸について携帯電話の通信状況や道路状況の調査を実施した。その結果、通信状況は10戸中8戸が圏外であることが判明し(表2)、農場所所有の電話等利用を協議し発生時の利用許可を得た。

農場	通信状況
農場1	圏外
農場2	圏外
農場3	圏外
農場4	場内一部圏内
農場5	ほぼ圏外
農場6	圏外
農場7	圏外
農場8	圏外
農場9	圏外
農場10	圏外

表2 携帯電話の通信状況

さらに10戸全ての農場において大型バスでは通行不可であることを確認した。

### (5) 集合施設

管内では、集合施設を3か所設定しているが、2か所については、発生事例および実動演習により詳細なレイアウトを作成し、現地確認も実施済みだった。

残りの1か所についても、誰でも設営出来るようレイアウトを作成し、実動演習で担当職員に実践させることで設営から運営までの

実施が可能である事を確認した（図4）。



図4 作成したレイアウトと防疫演習の様子

#### 4 まとめ

県内での HPAI の続発に伴い、防疫作業で様々な課題に直面したことから家保ではすみやかな情報の精査が必須と考え、実施した。

この取り組みを通じて農場では関係者と協議を重ねて、実行性のある計画づくりに役立てたほか、農場との連携、防疫意識向上に寄与した。

防疫拠点に関しては、状況調査を実施し、発生事例に基づく具体的な計画作りに役立て、関係機関と連携し防疫意識向上に寄与した。

今後も農場、関係機関と共に HPAI に立ち向かう防疫体制・防疫意識作りを強化していきたい。